



森 まゆみ 著

東京遺産

—保存から再生・活用へ—

岩波新書

858

東京遺産 —保存から再生・活用へ—
著者は、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊して以降、同誌の編集や著作のかたわら、東京駅、同潤会アパート、丸ビル、上野の奏楽堂など東京に残るさまざまな歴史的建造物の保存運動にかかわってきた。二〇年にわたるその活動を記録し、再生・活用するためには、どのようにしたらよいかを提言する。都区内の文化財(建造物)一覧等を付す

読書家の雑誌

図書

定期購読をお勧めいたします

[A5判・本文64頁/毎月]日発行
年間購読料=1000円(税・送料込)

▶定期購読のお申し込み方法
ハガキ(〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5)、FAX(03-3263-6999)で岩波書店「図書」購読係宛、または岩波ホームページ(<http://www.iwanami.co.jp/tocho/>)をご利用ください、最新号と振込手続用紙をお送りします。

2 はん亭とふるかわ庵

池之端の岩崎邸、西ヶ原の古河邸、白金の朝香宮邸、こうしたかなり大きく、独得な様式の、歴史的価値の高い建造物は行政が主体となって残すことができる。あるいは東京駅や東京銀行倶楽部といった大企業や団体のもつ公共性の高い建築は、持主の負担で残すことも可能だ。

しかしバブルがはじけ、行政の税収は少なくなり、建物の保存なんて余裕はないという声は内部で強い。また企業も残念なことながら、そうした景観や歴史性の保存、公共性のための支出を負担したくない気分になっているようだ。

町の中で、毎日のように古い、人のおいのする建物が壊されるのを見てみると、どうにか別の形で残せないものかと思う。その一つの方法は、その建物とそのままがプラスに活かされるように商業的に用いることだろう。

私は旅をするとき鉄筋コンクリートの大旅館、大ホテルには泊まらない。三階建ての木造旅館とか、江戸期の旅館、クラシックホテルなどをさがす。例を挙げれば、白布温泉・中屋、長野善光寺門前・富士屋、足助・玉田屋、尾道・魚信旅館、川越・佐久間旅館など。ホテルでは、軽井沢万平ホテル、箱根富士屋ホテル、奈良ホテル、日光・金谷ホテルなどはやや分不相応だ

が、一度は泊まってみたいと思ひ、その夢をかなえた。他にお金をつかわないからこういうときはゼイタクする。といっても新しい豪華な宿より高いわけではない。

新しく清潔な建物や設備を好む人の方が多数派だろうが、私は、古い落ちついた宿の方が忙しい日々の生活を忘れ、ゆっくりくつろげる。そのうえ、何十年前の棟梁や左官の仕事が見られ、床の間にかかる軸や食器なども年代を経ていて味わい深い。古い町には蔵を改造したジャズ喫茶や、遊郭の建物をバーにした所などもあって、夜はそこで時を過ごす。

東京は地価が高いので、由緒ある建物で客単価の安い喫茶店、というのでは立ちゆかない。古い建物はいま許される容積率よりたいていずっと小さく、坪当たりの客の数は少なくなってしまう、一杯四〇〇円のコーヒーで二時間粘る客が相手では成立しないのである。

串揚げ屋・はん亭

どうしたら可能か。うまくいっている例が根津の串揚げ屋・はん亭だろう。根津駅から一五〇メートル。表の不忍通りの一本裏通り、通称五人堀と称した道に三階建ての家がある。この道に夕暮れに立っていると人通りが多いのに驚く。買物の主婦、上野高校の帰り道の学生、塾へ通う子ども、駄菓子屋兼本屋の伊沢屋の前にたむろする少年たち……。そしてかつてまわりには、『チベット旅行記』を書いた河口慧海が住んでいた和洋折衷住宅、家政婦紹介所、三味

た。独立して銀座コリドー街の地下で『くし一』を始めたら当ってね。

うちは長女が難産でした。女房をお産で苦労させたから、次に男の子が生れたら、会社をやめて、僕もちがった人生をスタートさせるぞ、っていったんです。そしたら男の子が生れちゃいました。それで『くし一』の彼んとこに見習いに行っ、仕事を覚えて上野に店を出したってわけです」

一五年おつきあいしているが、こんな話は始めて聞いた。これだけユニークな店をはじめた高須さんの個人史もじつにユニークだ。古い建築ばかりでなく、それにまつわる人の物語はおもしろい。いつもにこやかな高須さんだが、最初はいらっしゃいませ、ありがとうございます、がいえ、毎日トイレの中で練習したそう。

そういえば「はん亭」の周りはこの数年、いい店ラッシュである。「はん亭」がいっぱいで入れなかった客が周辺に流れる効果もあり、急に夜がにぎわいはじめた。

不忍通りの拡幅のため、表通りに面したファサードがなくなるという残念なこともあったが、このたびめでたく、はん亭は国の有形文化財に登録された。

料亭「ふるかわ庵」

もうひとつ、はん亭とも近いが旧谷中清水町の「ふるかわ庵」をお訪ねした。住宅街のわか

りにくい所にあるが、ここは昭和一二年築の住宅を改造して、割烹としている。ご主人古川潔さんは高須さんより「世代」下の戦後生れ。

「私はここで生れたんです。うちは初代が古川彦兵衛といまして、浅草で万盛庵というそば屋をやっておりました。大変はやって、同じ浅草で万盛庵なんて芝居小屋もやってたそうです。その一人娘が私の祖母の古川はつ。

昭和三〇年代まで元気で、大変気丈な人でした。私の父は朝太郎という人ですが、仕事らしい仕事はしたことがないんじゃないですか。坊っちゃん、家の財産があったから。でもモダンで趣味のある人でした。母は池之端の鰻の伊豆栄の娘。私はその末っ子なんです。父が戦争から帰って生れました。

私が大学を途中でやめて商売をはじめたときは母は嘆いてました。京橋、銀座、日本橋、飯田橋で「かんてら」という喫茶店をやった。最初ここを「かんてら庵」と称したのはそのためです。



ふるかわ庵(1937年築)

そのうち父も母も病気になるって、私がここに戻ることになって、いろんな意味で転機だったですね。そのとき森さんの『谷中スケッチブック』が出て、それを読んで、この土地と建物を生かして店をやってみようと思いつきました。十何年前ですが、まだ世の中はバブルの前で、金をかけて投資して、なんでも新しく効率よく、という時代でしたがその逆をいった。もとからある建物に少量の投資で。

うちはお客さまが落ちつかれてしまうから回転しません。一日一回転です。わかりにくい場所にあるのが新鮮という方もある。やはり日本の文化のもつわび、さび、むだ、そういうものを大事にしないとイケないと思います。谷中ってのはそういう商売ができる所ですね」

お店への改造は来馬輝順氏の設計によって行われた。店の前の大きな壺には花が活けられている。引き戸をあけると土間、上って左手に二、三席のカウンター。その奥が厨房。土間からまっすぐに上るとつき当りがテーブル席一つ。その左に二間つづきの座敷。庭に面して奥に六畳の離れ。

「六畳はおばあちゃんが寝起きしてたところで少人数の会はここが落ちつくとおっしゃる。二間つづきの方はつなげると二十名様くらいの宴会はできますが、いつもはつい立てで仕切って、お二人ぐらいずつ入っていただいて」

多くても一日七、八組くらいだろう。私も人に紹介したり、自分でも宴に連なったことがあるが、参加者はみんなくつろぎ満足するようだ。古いダンス、ラジオ、シルクハットなど、この家伝来のものが調度として、あるいはかざられており、ときに毛なみのいい猫が廊下を横切る。のんびりした気持よい感じだ。ラジオを見上げて大本営発表なんて聞こえてきそうだな、といった人もあれば、こんな欄間、生れた家にもあった、という客もいた。料理はコースで四季ことなり、お酒のリストも豊富で、客は静かに食事を楽しむ。どんちゃん騒ぎをすることは雰囲気許さないから、女性に評判がいい。

外壁はこの地域では防火上、木にできないので、以前はブロック塀の上に竹が張ってあった。なるほど苦心してるな、と思ったがややわざとらしかった。いまは黒っぽいスレート様ものにかわり、ずっとすっきりした。

居酒屋甚八

谷中から根津へ寄り、不忍通り東側の一本裏通りの「甚八」が再開したというので寄ってみた。この通りも好きな道だ。そばの玉を売る店、アイスクリーム屋、耳鼻科、酒屋、クリーニング店、花屋、小間物屋の間に、仕舞屋しまたが混じり、素通しガラスの向うに下町の人びとの生活が透けてみえる。

そこにある「甚八」は黒い板戸がずっと閉ったままであった。平屋の小体こていな飲屋。私は学生